

日とも、豊旗雲に入日刺なども云ひしもの是也、今俗にアサヤケ、ユフヤケなどいふなり、カスミといひしは、赤彩なり、萬葉集抄にカといひしは、赤き義なりといひ、語の詞なり、カといふ、アは發呼ぶが如し、其色の火の焼るが如くなるなり、ヤケといひ、ヤケといふも、また此語を合て、日本紀には、彩讀てシミといふは、即染也、シミといひ、スミといひ、ソミといふ、皆轉語なり、萬葉集の歌に、染讀

〔倭訓栞前編六〕かすみ 霞をよめり、赤染の義也、唐韻に日邊赤雲也と見えたり、あかねさす日といへるも此義也といへり、烟も同じ、うすかすみを薄烟といふ、全浙兵制に、霞をやけと譯せしも

亦此義也、俗に朝やけ夕やけなどいへり、秋に霞を詠する事、萬葉集に見え、文選の詩に、輕霞冠秋日とも見えたり、歌に多く春霞などいへるは、霞にあらす、靄字を用べしといへり、霞しくといふ辭は、喜撰式に春をいふと見えぬれど、萬葉集にも見えず、中比より人の好みよむ言葉となれりとぞ、歌に霞の衣、霞の袖、霞の窓、霞の籬、霞の沖、霞の波、霞の水尾などよめるは、皆見たてたる詞也、曹文姬が詩に、霞衣曾惹御爐香とも見えたり、

〔八雲御抄天象〕霞 あさ ゆふ うす 春 八へ八重霞は只深也、必非八重、一切物重多限を號一爲員限云、〇中略 霞のころもは本文也、詩にもあり 又方に 霞ある 霞ながる、ながる、

かすみといへり 玄まひね霞也 万にこのは玄のぎて霞たなびく 霞かゝるといふ事 高陽院歌合に、顯綱歌を經信不審する也、もすのくさぐさは霞なりと、俊頼いへり、それも一定け色なし、げにもそら事とおぼえたり、

〔古事記應神〕於是有二神、兄號秋山之下水壯夫、弟名春山之霞壯夫、

〔枕草子十〕日はうらゝかなれど、そらはあさみどりにかすみわたるに、女房のさうぞくの匂ひ

あひて、いみじきおり物の色々のから衣などよりも、なまめかしうをかしき事かぎりなし、

〔源氏物語五紫〕うしろの山にたち出て、京のかたをみ給ふ、はるかにかすみわたたりて、四方の梢そ